

■ワークショップ 1 ■

子どもの哲学の理論研究

キーワード：子どもの哲学 P4C (Philosophy for Children)、理論研究、哲学、教育学

土屋陽介、中川雅道、小川泰治

このワークショップは、3人の提題者が、子どもの哲学 (P4C: Philosophy for Children) に関する理論研究をそれぞれ発表しあう、研究発表形式のワークショップです。哲学プラクティスの実践者が集まる連絡会で、あえて理論研究のワークショップを開催することには、理由があります。子どもの哲学は、自由度の非常に高い教育実践であるため、それを実践していく上で基礎となる理論的な考察が欠かせないと私たちは考えているからです。

子どもの哲学は、ふつうの教育実践とは大きく異なっています。その中核にあるのは、「(広い意味で) 理性的に考える」という営みのみであり、子どもの哲学の実践者には、何事にも制約されず自由に「よく考える」場を作り出すことが求められます。しかし、そのための方法として、何か特定の教材やカリキュラムが用意されているわけではありません。¹ 対話をより深めていくための何らかの一般的な手法が存在するわけでもありません。教室の中に考える場 (= 探求の共同体) を作り出す具体的な方法や手法は、実践者の一人ひとりが、それぞれの実践現場の環境に合わせて、ゼロから自由に考えて工夫していかなければならないのです。

このような自由度の高さは、子どもの哲学の魅力であると同時に、子どもの哲学を実践する上での大きな困難でもあります。実践者は自分の授業を作り出していく過程で、そもそも哲学的に考えるとどのようなことか、理想的にはどのような探求の場を作り上げていくべきなのか、どのような教材や手法がどのような教育効果をあげる上で有効なのか、といったような問いに必ず突き当たります。こうした問いに関する理論研究の蓄積がなければ、実践者は何の拠り所もないままに、自分の経験だけに頼って授業を作り上げ、実践経験を積み重ねていくしかないでしょう。しかし、そのような理論的背景を欠いた実践をいくら繰り返しても、それだけで自動的に探求の共同体が形成されるとは思えないのです。

3人の提題者はみな、学校の中で授業の一環として子どもの哲学を継続的に実践している実践者でもあります。このワークショップでは、3人の提題者が、それぞれ異なる環境に身を置いて、日々子どもの哲学に取り組んでいる立場から、日々の実践に裏打ちされた理論研究の提示を試みます。当日は、参加者との活発な議論や質疑応答も通して、「実践を支えるための理論」を少しでも厚いものにできることを望んでいます。

¹ リップマンが開発した教材とカリキュラムは存在しますが、現在国内で使用している実践者はいません。

(つちや・ようすけ)：立教大学兼任講師。開智中学・高等学校「哲学対話」担当。専門は子どもの哲学、哲学教育、現代哲学。

(なかがわ・まさみち)：神戸大学附属中等教育学校教諭。p4c-japan (<http://p4c-japan.com/>) で色々な先生とP4C研究中。

(おがわ・たいじ)：早稲田大学大学院博士後期課程。開智日本橋学園中学校「哲学対話」非常勤講師。専門は倫理学、子どもの哲学。